

鳥取県西伯郡伯耆町

いず も かい どう あと
出 雲 街 道 跡

2025. 3

一般財団法人 米子市文化財団

序

当財団では、令和5年度、6年度に鳥取県の委託を受け、三部支川砂防堰堤工事に伴う出雲街道跡の発掘調査を実施いたしました。

当該地については、令和3年度に伯耆町教育委員会で試掘調査が実施され、出雲街道跡の存在が推定され、その結果を受けて発掘調査を行い、出雲街道跡を検出しました。

街道跡の路面は突き固められ、その法面には土留め用の石列が認められ、街道路の構造等を研究するうえで貴重な一資料を得ることができたと思います。

この度、調査成果をまとめ、発掘調査報告書として『出雲街道跡』を刊行することができました。本報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解、関心がより深まることを期待しています。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導・ご助言をいただきました関係各位に対し、心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

令和7年（2025年）3月

一般財団法人 米子市文化財団

理 事 長 杉 原 弘 一 郎

例 言

1. 本報告書は、鳥取県が計画する三部支川砂防堰堤工事に伴い、令和5年度に鳥取県西伯郡伯耆町三部地内で実施した出雲街道跡の発掘調査の報告書であり、令和6年度に報告書の作成を行った。
2. 発掘調査は、鳥取県の委託を受けて一般財団法人 米子市文化財団が実施した。
3. 本報告書における方位は公共座標北を示し、X、Yの数値は世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標値である。また、レベルは海拔標高を示す。
4. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「米子」及び同「根雨」、鳥取県西部総合事務所米子県土整備局作成の1/500「三部支川平面図」を加筆して使用した。
5. 本報告書に掲載した遺物の実測、浄書は、一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室で行った。
6. 本報告書の執筆、編集は、主に下高瑞哉が行い、埋蔵文化財調査室職員が補佐した。
7. 発掘調査によって作成された図面、写真等の記録類は米子市埋蔵文化財センター、出土遺物は伯耆町教育委員会で保管している。
8. 現地調査及び報告書の作成には、多くの方々からご指導、ご支援を頂いた。明記して感謝いたします（敬称略）。

伯耆町教育委員会 鳥取県西部総合事務所米子県土整備局 鳥取県埋蔵文化財センター
鳥取県とっとり弥生の王国推進課

凡 例

1. 出雲街道跡の略称は「SBI ZK」とした。
2. 本報告書における遺物の縮尺は以下のとおりである。
土器、土製品：1/3
3. 本文中、挿図中、遺物観察表中及び写真図版中の遺物番号は一致する。
4. 遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外は断面白抜きで示した。
5. 遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。

目 次

序

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 整理作業の経過	1
第4節 調査体制	2

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法	8
-----------	---

第4章 検出した遺構と遺物

第1節 1区の調査	
1. 概 要	8
第2節 2区の調査	
1. 概 要	8
2. 街道跡	8
3. 出土遺物	11
遺物観察表	11

第5章 総 括 13

写真図版

報告書抄録

插图目次

第1图	遺跡位置図	2
第2图	周辺遺跡分布図	7
第3图	調査区配置図	9
第4图	土層断面図	10
第5图	出土遺物実測図	12

挿表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	6
第2表	出土遺物観察表	11

写真図版目次

図版1 1区、2区

図版2 2区

図版3 出土遺物

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県西伯郡伯耆町三部地内において計画された三部支川砂防堰堤工事に伴い、工事対象地内に存在する埋蔵文化財について実施したものである。

工事対象地には、出雲街道跡のルートが推定されており、工事に先立って工事対象地内の遺跡の有無及びその範囲を確認する必要があるが生じ、伯耆町教育委員会が令和3年度に実施した試掘調査では、現町道の路盤の検出に留まっていたが、出雲街道の法面の土留めのための石列が検出された。

この結果を受け、鳥取県西部総合事務所米子県土整備局と伯耆町教育委員会は遺跡の取り扱いについて協議を行い、発掘調査が必要との判断に至った。そこで、鳥取県西部総合事務所長は発掘調査を伯耆町教育委員会に依頼したが、伯耆町教育委員会は、体制上、発掘調査は困難であるという回答を行った。そのため、協議の結果、鳥取県西部総合事務所長は、一般財団法人米子市文化財団に発掘調査を委託することとなり、一般財団法人米子市文化財団は令和5年（2023年）9月4日付で文化財保護法第92条に基づく発掘調査届を鳥取県知事に提出し、令和5年（2023年）11月1日付で鳥取県西部総合事務所と発掘調査に係る委託契約を締結した。これに基づき当財団埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施した。

第2節 調査の経過

発掘調査は、工事により影響を受ける20㎡を対象とし、令和6年（2024年）1月29日から令和6年2月16日までの期間で現地調査を行った。

調査にあたっては、調査対象地が2ヶ所に分かれていたため、西側を1区、東側を2区として調査区を2つに分け、1区→2区の順に調査に着手した。

1区は、1月29日に除雪、器材搬入、重機による表土掘削を行い、1月29日から2月1日にかけて発掘作業員による包含層の掘下げ、遺構の検出を行った。1区の調査は、2月2日に終了した。

2区は、2月2日に重機による表土掘削を行い、2月2日から2月16日にかけて発掘作業員による包含層の掘削、遺構の検出を行った。2区の調査は、2月16日に終了した。

2月16日には発掘調査現場の片付け及び周辺環境整備を行い、2月16日には発掘器材を撤収し、すべての調査が終了した。

第3節 整理作業の経過

出土遺物の整理作業は、出土遺物の把握、図面確認等の基礎的な整理作業の一部を現地調査終了後の令和5年度に行い、令和6年4月から本格的な整理作業に着手し、出土遺物の洗浄と注記、接合作業を行った。その後、遺物の実測、トレース、図面作成、写真撮影を実施し、年度末に報告書を刊行した。

第4節 調査体制

・令和5年度

事業主体 一般財団法人 米子市文化財団

理事長 杉原弘一郎

常務理事 先瀬 達也（一般財団法人 米子市文化財団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室長兼調査員 下高 瑞哉

主任主事 田中 昌子

事業担当 室長兼調査員 下高 瑞哉

調査補助員 永登 朋子 土井 光政

調査指導・助言・協力

伯耆町教育委員会 鳥取県西部総合事務所米子県土整備局

鳥取県とっとり弥生の王国推進課 鳥取県埋蔵文化財センター

・令和6年度

事業主体 一般財団法人 米子市文化財団

理事長 杉原弘一郎

常務理事 先瀬 達也（一般財団法人 米子市文化財団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室長兼調査員 下高 瑞哉

主任主事 田中 昌子

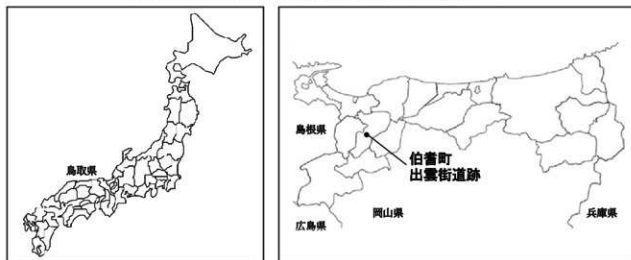
事業担当 室長兼調査員 下高 瑞哉

調査補助員 永登 朋子 土井 光政

調査指導・助言・協力

伯耆町教育委員会 鳥取県西部総合事務所米子県土整備局

鳥取県とっとり弥生の王国推進課 鳥取県埋蔵文化財センター



第1図 道跡位置図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

鳥取県西伯郡伯耆町は、鳥取県西部の大山の西麓に位置し、北は米子市と西伯郡大山町、東は日野郡江府町、南は日野郡日野町、西は西伯郡南部町と接している。

町の東部から北東にかけては、大山山麓の枳水高原から水無原に連なる高原地帯と、なだらかな丘陵地帯が広がっている。一方、南東部は溪谷状をなし、南から南西部にかけては中国山地の連山に囲まれた山間地を形成している。南側は高度600m内外で日野町に接し、山頂部は老年期の地形の名残を示し、間地峠、矢倉峠などの峠がある。西側は高塚山（標高270m）、南西端は越敷山（標高227m）を中心とした起伏のある丘陵地形であるが、その北端部分には大山の火山噴出物が堆積し、右岸とよく似た台地上の地形となっている。北側は、岸本扇状地を形成し、米子平野とつづいている。また、町の中央を流れる日野川や、日野川に合流する野上川流域には沖積層からなる谷底平野が発達し、溝口・荘付近では小規模な河岸段丘がみられる。

伯耆町の地形及び地質は、日野川を挟んで大きく様相が異なる。

日野川右岸地域は、大山西麓から、日野川流域に向かって緩やかに下降する台地で、標高60mの辺りで日野川の侵食を受け段丘崖となって落ち込み、別所川、清山川、大江川、白水川などの小河川が西流して日野川に注いでいる。北東側は大山火山の新期火砕流堆積物からなる高原（枳水高原・福永高原など）が広がり、大山火山の溝口凝灰角礫岩からなる丘陵などが小規模にみられる。右岸の台地は、南側では安山岩質の砂礫層、北側では火山砕屑物を主体とする古期扇状地堆積物を基盤としており、上部は大山上中部火山灰に覆われている。また、日野川沿岸には段丘堆積物がみられるが、特に別所川右岸から岸本原、米子市の石州府にかけては岸本礫層と呼ばれる堆積層をなしている。

日野川左岸地域は、高塚山（標高270m）、越敷山（標高227m）を中心とした丘陵地帯と米子平野に面する北端では長者原台地と呼ばれる平坦な沖積台地となっている。南側は、主に白亜紀後期～古第三紀の花崗岩類からなる小へ中起伏山地がそびえ、その北側に更新世前期に噴出した玄武岩からなる高塚山と越敷山を中心とした台地となっている。左岸の丘陵地帯は、南側は安山岩質堆積物、北側は粗面玄武岩を基盤とし、部分的に大山上中部火山灰に覆われている。

出雲街道は、出雲松江を起点とし、途中のルートは省略するが、伯耆町三部を経て、中国山地を越えて播磨姫路へ至る街道で、「出雲往来」などと称され、近世には松江藩主と広瀬藩主が参勤交代の際に用いた街道である。

調査地は、伯耆町西部の伯耆町三部に所在し、標高270mの高塚山から南へのびる丘陵の先端裾部に位置し、現況は町道の道路敷となっており、この町道が出雲街道のルートと想定されている。

調査地の南側には、沖積層からなる谷底平野が広がり、その平野内を日野川の支流である野上川が北流する。野上川流域は近代から大正まで豊富な砂鉄資源を利用したたたら製鉄が盛んに行われてきた地域で、流域には多くのたたら跡が確認されている。

第2節 歴史的環境

旧石器時代

鳥取県西部地方では、旧石器時代にまで遡る資料は数少ないが、長者原台地上に位置する遺跡からナイフ形石器が出土している。米子市の諏訪西山ノ後遺跡では珪岩製のナイフ形石器がローム層から出土し、坂長村上遺跡では黒曜石製のナイフ形石器が1点出土しており、日野川左岸地域でも後期旧石器時代の遺跡が存在することが推察される。

縄文時代

草創期には、サヌカイト製の尖頭器が大山山麓を中心に分布しているほか、長者原台地上の坂長村上遺跡では5点の尖頭器がまとまって出土している。また、越敷山山麓の坂長ブジラ遺跡、坂長第8遺跡、大山山麓の貝田原遺跡、日野川左岸の三部野遺跡でも尖頭器が出土している。

早期には、集落遺跡としてまとまりのある米子市の上福万遺跡があり、大山山麓の岸本遺跡と岸本下ノ原遺跡では上福万遺跡と同様な集石遺構が検出され、同じく大山山麓の林ヶ原遺跡、長山馬籠遺跡、井後草里遺跡、久古北田山遺跡、須村遺跡で押型文土器が出土している。

前期には、長山馬籠遺跡と下山南通遺跡で前期前葉の西川津式土器が出土している。また、長山馬籠遺跡から出土した前期前葉の隆帯文土器は、「長山式」あるいは「長山馬籠式」の標識資料となっている。

前期中葉から後期の資料は減少傾向にあり、集落の実態は明らかではないが、晩期になると、大山山麓では、久古第3遺跡で竪穴建物跡と集石遺構、根雨原土手下タ遺跡で集石遺構、長者原台地の坂長宮田ノ上遺跡、坂中第5遺跡、坂長越敷ノ原遺跡、越敷山山麓の小町石橋ノ上遺跡、小町第1遺跡、小町越城野原第1・2遺跡、金廻家ノ上ノ内遺跡、野上川流域の三部野遺跡などでは陥し穴が検出されている。また、この他に番原第6遺跡、坂長越敷ノ原遺跡、小町越城野原遺跡などでは突帯文土器が出土しており、遺跡が散見されるようになる。

弥生時代

前期から中期前葉の遺跡は少なく、前期の遺跡では、大山山麓の久古第3遺跡、越敷山山麓の坂長前田遺跡と坂長第8遺跡、金廻谷平遺跡で土器が出土している。このうち、坂長第8遺跡では多量の石鍬が出土しており、初期の農耕に関わる遺物が含まれている。

中期中葉以降、丘陵上に展開する集落が増え、日野川中流域では、下山南通遺跡で中期中葉から後葉の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、貯蔵穴が検出されている。また、長山馬籠遺跡では大型の掘立柱建物跡が検出され、中期後葉の土器が良好な状態でまとまって出土している。越敷山山麓では、坂長尻田平遺跡、坂長ブジラ遺跡、金廻家ノ上遺跡から貯蔵穴と共に土器が出土している。

後期には、日野川左岸では、代遺跡で比較的大規模な集落跡が確認され、父原墳丘墓群で四隅突出型墳丘墓が確認されている。両遺跡からは吉備系の土器を模倣した土器が出土しており、日野川中流域と吉備地方との交流が窺える。越敷山山麓では、標高の高い丘陵上に集落が形成され、金廻家ノ上ノ内遺跡、坂長越敷ノ原遺跡では竪穴建物跡と掘立柱建物跡が検出されている。後期中葉には越敷山遺跡群で大規模な集落が形成されるが、後期後葉～末にかけて縮小し、古墳時代前期初頭には廃絶し

ている。

古墳時代

伯耆町内では、古墳時代前期まで遡る古墳は現在のところ確認されていない。

中期になると、越敷山から長者原台地を中心とした地域に古墳がみられるようになる。

後期には、日野川右岸では、石材を小口積みにした横穴式石室を採用した吉定1号墳（細見神社古墳、町指定文化財）や径45mの円墳で横穴式石室を有する岸本7号墳（町指定文化財）がある。しかし、石州府古墳群のような横穴式石室を主体とする大規模な群集墳を形成する動向は窺えず、越敷山80号墳や小町越城野原第11遺跡（越敷山134・137・138号墳）では、横穴式石室が小型化しており、山寄の古墳で終末期に近い段階のものと考えられる。

終末期には、鳥取県西部では横穴墓が各地に数多くつくられるようになるが、伯耆町内では、宇代横平遺跡で横穴墓が確認されている。

集落遺跡は、長者原台地上に位置する青木遺跡や諏訪西山ノ後遺跡のような大規模な集落は確認されておらず、前期初頭の坂長第6遺跡、中期中葉の坂長第8遺跡、坂長ヨコロ遺跡、後期の坂長宮田ノ上遺跡などで単独あるいは数棟程度の竪穴建物跡が検出されている。

古 代

長者原台地上では、長者屋敷遺跡、坂長下屋敷遺跡、坂長第6遺跡で大型の掘立柱建物跡が検出され、諏訪西土取場遺跡、諏訪東土取場遺跡、大殿下ノ原遺跡で官衙的建物配置をとる掘立柱建物跡が検出されている。さらに谷部に位置する坂長第7遺跡からは正税に関すると考えられる木簡が出土していることから、長者原台地上とその周辺の谷部にも会見郡衙に関する遺跡が点在することが明らかとなってきた。特に、坂長第6遺跡からは大量の鍛冶関連遺物が出土しており、郡衙に付属する鉄生産工房として注目される。

白鳳期には、大寺庵寺が建立される。東向きの法起寺式伽藍配置を採用し、瓦積基壇の金堂と舍利孔を持つ塔心礎が確認されている。また、福樹寺境内にある高さ1mの石製駒尾は、大山山麓に産出する安山岩を加工したもので、大寺庵寺の金堂の屋根に置かれていたとされている。平安期には長者原台地上に坂中庵寺が建立される。

中 世

長者原台地一帯は、平安時代末から鎌倉時代初頭にかけて活躍した紀成盛の本拠地であったという伝承があり、紀成盛は、承安元年（1171）に焼失した大山寺の本堂を再建し、本尊の仏像とそれを納める鉄製の厨子を奉納している。また、坂長武寿羅遺跡では掘立柱建物跡、坂長前田遺跡では平安末期から鎌倉期と考えられる小札が出土していることから、この地域での活発な動きが窺える。

南北朝期には、大寺に安国寺という六十もの僧房を持つ三千石を領する大寺院が存在したと伝えられているが、永禄8年（1565）杉原盛重により焼き討ちにされたといわれている。

戦国期には、尼子氏の侵攻とその後の毛利氏の侵攻に伴い、各地に城館が築かれる。伯耆町内には候補地も含め13の中世城館が確認されている。このうち、福島城と野上城、代遺跡では発掘調査が行われ、福島城では建物跡、柵列、石塁、野上城では郭、代遺跡では城館跡が確認されている。

宇代寺中遺跡では丘陵上の平坦地から2棟の掘立柱建物跡と中世の墳墓と考えられる集石遺構が検出されている。墳墓は坂長ヨコロ遺跡でも検出されており、石積墓と備前焼の壺が出土している。また、野上城、三部古城山遺跡、三部長龍寺谷遺跡でも中世墓が検出されている。三部古城山遺跡では中世後半から近世初頭にかけての鍛造工房跡が検出されている。

近 世

中世末期から近世初頭にかけての西伯耆地方は、吉川広家、中村一忠、加藤貞泰と頻りに領主が交代したが、元和3年(1617)には池田光政が鳥取藩32万石を領し、寛永9年(1632)に国替により池田光仲が鳥取藩主となると、池田家筆頭家老の荒尾氏による自分手政治が幕末まで続いた。

伯耆町三部は、近世には三部村と称し、集落は野上川左岸の出雲街道沿いとその両側の山裾に分かれ、村の北部で天万宿(南部町)からの新出雲街道が出雲街道に合流する。

藩政期の拝領高は、282石余、本免は五ツ二分で、幕末の「六郡郷村生高寛付」では、生高379石余、寛数30、「伯耆志」では、林160町6反、家数51、人数157、産物は砂鉄とあり、載役2匁が課されていた。また、牛馬市が開かれたと伝えられ、幕末には薬用人参栽培も行われていた。『共武政表』では、明治12年(1879)の家数67、人数317(男156・女161)、馬24、牛15とある。山奉行所が設置されており、享保10年(1725)から在下吟味役を帯務した。また、荷物継送用の人馬の用意もあり、幕末には飛脚が2人置かれていた。

第1表 周辺遺跡一覧表

1 坂長村上遺跡	2 坂長下屋敷遺跡	3 坂中庵寺跡	4 坂長第6遺跡
5 坂長第7遺跡	6 坂長第8遺跡	7 坂長下門前遺跡	8 坂長宮田ノ上遺跡
9 坂中第5遺跡	10 大寺庵寺跡	11 大寺原遺跡	12 越敷野原遺跡
13 坂長ブヅラ遺跡	14 坂長ヨコロ遺跡	15 坂長熊谷遺跡	16 坂長前田遺跡
17 坂長佛谷遺跡	18 金廻芦谷平遺跡	19 金廻家ノ上遺跡	20 小町石橋ノ上遺跡
21 小町越城野原第2遺跡	22 小町越城野原第1遺跡	23 荻名第1遺跡	24 荻名第2遺跡
25 上野遺跡	26 越敷山遺跡群	27 小町越城野原第9遺跡	28 小町越城野原第10遺跡
29 小町第1遺跡	30 小町越城野原第11遺跡	31 御墓原遺跡	32 鶴田第2遺跡
33 鶴田東山遺跡	34 鶴田合清水遺跡	35 鶴田荒神ノ峯遺跡	36 堤ヶ谷遺跡
37 代寺中遺跡	38 宇代横半山遺跡	39 宇代1号墳	40 代遺跡
41 三部野遺跡	42 父原墳丘墓	43 出雲街道跡	44 三部古城山遺跡
45 三部長龍寺谷遺跡	46 福島城	47 日下古墳群	48 上福万遺跡
49 石州府古墳群	50 岸本遺跡	51 岸本下ノ原遺跡	52 岸本要害
53 岸本古墳群	54 吉定古墳群	55 口別所古墳群	56 貝田原遺跡
57 久古第3遺跡	58 長塚原古墳群	59 久古北田山遺跡	60 番原第1遺跡
61 丸山朝日当遺跡	62 真野ブナ遺跡	63 藍野遺跡	64 大平古墳群
65 大平原第1遺跡	66 大平原第2遺跡	67 林ヶ原遺跡	68 溝口上野第1遺跡
69 上野貝塚遺跡	70 溝口上野第2遺跡	71 溝口上野第3遺跡	72 竹原遺跡
73 川平遺跡	74 下山南通遺跡	75 長山馬籠遺跡	76 長山古墳群
77 長山第2遺跡	78 鬼住山城	79 矢倉要害	80 谷川遺跡
81 谷川城	82 落し原遺跡	83 根雨原土手下タ遺跡	



第2図 周辺遺跡分布図

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法

今回の発掘調査は、鳥取県が実施する三部支川砂防堰堤工事に伴うもので、工事対象範囲のうち、工事による影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

調査地は、東西2ヶ所に離れて位置しており、西側を1区、東側を2区とし（第2図）、1区→2区の順に調査に着手した。

調査に当たっては、調査地がアスファルト舗装された町道であったため、重機によりアスファルト及び路床の碎石を掘削した後、発掘作業員による人力で掘削した。なお、2区では重機のアームが届かず、一度にアスファルト及び路床の碎石を掘削することができなかったため、2-1区と2-2区の2つに調査区を分けて調査を実施した。

調査面積は20㎡、現地の発掘調査は、令和6年（2024年）1月29日～2月16日、一部の整理作業を現地調査終了後実施し、本格的な整理作業を令和6年度（2024年度）に実施した。

検出した遺構と遺物の記録には、遺構測量支援システム（株式会社 CUBIC製 遺構くん）を用い、写真撮影は、一眼レフデジタルカメラを使用して撮影を行った。

第4章 検出した遺構と遺物

第1節 1区の調査

1. 概要

調査区内に道路を横断する山側からの下がり水を処理するヒューム管が2本あり、遺構はほとんど壊されていた。真砂土を敷き固めた道路状の硬化面が一部残存していたが、明確な時期決定には至らなかった。この部分は、可能性として、明治期以降の農道と考えられる。その下層には、非常に硬くしまった層が断面で確認でき、これが江戸期の出雲街道の痕跡の可能性はある。

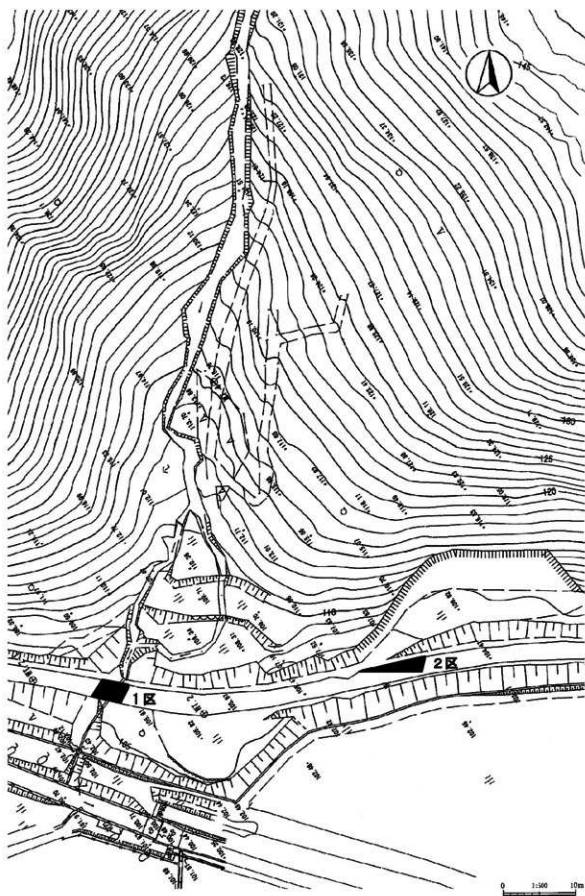
第2節 2区の調査

1. 概要

令和3年度に試掘調査されたほぼT1に該当する。工事での掘削予定範囲を発掘した。調査深度は掘削による影響範囲とした。

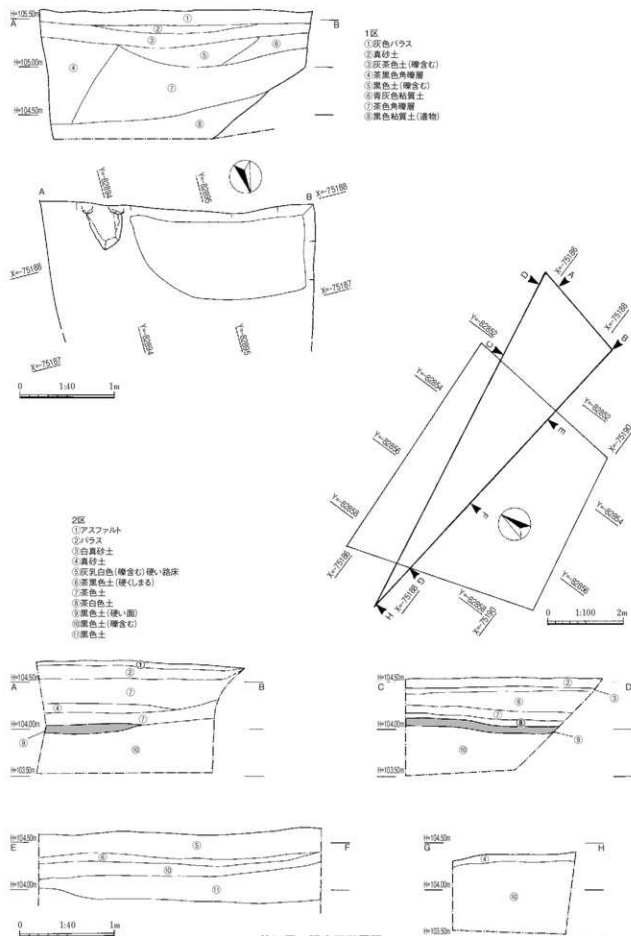
2. 街道跡（第4図）

令和3年度に伯耆町教育委員会が実施した試掘調査段階では、アスファルト直下の真砂土の硬化面から15cm程度下層に灰色系と黄色系の砂層と礫層が互層構造を示し、路床の転圧が行われ、街道の補修の結果と判断されている。敲きしめられた層厚は約20cm程度である。この面は、試掘調査段階で確認された街道の道路敷きの土留め用石列のレベルからするとかなり高いと思われ、また、明確な



第3図 調査区配置図

第4章 検出した遺構と遺物



時期決定ができる遺物等は確認されず、明治期以降の道路整備による硬化面の可能性も考えられた。

さらに、工事の掘削深度まで、下層を掘下げたところ、バラス下約45cm～50cm（標高約104m前後）で黒色土の硬化面が確認された。層厚が約20cm程度あり、黒色土を固めた非常に硬いもので、この面が出雲街道の路面の可能性があると考えられ、試掘調査で確認されている土留め用の石列のレベルとも合致する。

新出雲街道に道替えが行われた後も長期間にわたり利用されてきた道であり、時期決定には困難なものがあつた。

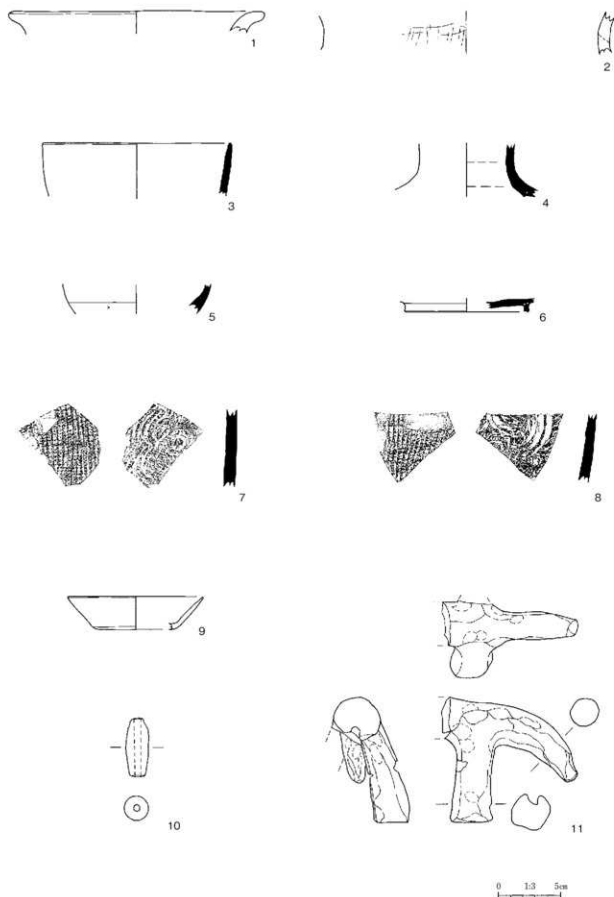
また、黒色土中から須恵器、土師器、土馬等が検出され、丘陵裾部に古代の遺跡の存在を窺わせるものである。

3. 出土遺物（第5図）

1、2は土師器甕で、1は口縁部、2は頸部である。3～8は須恵器である。3は坏身で、僅かに外傾して真っすぐ立ち上がる。4は直口壺の頸部、5は壺の胴部下半部である。6は高台付きの坏身で、底部外面には回転糸切りが施されている。7、8は甕で、外面には叩き目、内面には同心円状の当て具痕がみられる。9は土師質土器の坏身で、外傾して立ち上がる。10、11は土製品で、10は管状土鍾である。11は土馬で、腰部、左後脚部、尾部が残存するのみであるが、尾部は太くて長く、脚部内面には心棒の痕跡がある。

第2表 出土遺物観察表

遺物 番号	挿図 番号	出土地 層位	種別 器種	法 量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
				口 径	底 径	器 高					
1	5	2区-1 黒色土	土師器 甕	※20.2	—	△1.8	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	橙 色	
2	5	2区-2	土師器 甕	—	—	△3.4	外面：ハケ後ナデ 内面：ナデ	密	良	黄橙色	
3	5	2区-1 黒色土	須恵器 坏 身	※14.8	—	△4.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	青灰色	
4	5	2区-1 黒色土	須恵器 壺	—	—	△2.2	外面：回転ナデ 内面：ナデ	密	良	青灰色	
5	5	2区-1 黒色土	須恵器 壺	—	—	△2.3	外面：回転ヘラケズリ、 回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	灰 色	
6	5	2区-2	須恵器 坏 身	—	※9.8	△1.1	外面：高台付、回転糸切り 内面：ナデ	密	やや良	黒 色	
7	5	2区-1 黒色土	須恵器 甕	—	—	△6.2	外面：叩き 内面：同心円状の当て具痕	密	良	青灰色	
8	5	2区-1 黒色土	須恵器 甕	—	—	△5.5	外面：叩き 内面：同心円状の当て具痕	密	良	青灰色	
9	5	2区-1 黒色土	土師質土器 坏 身	※10.8	※6.8	2.6	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
10	5	2区-1 黒色土	土 鍾	長 4.6 径 1.8	直 径 1.8 孔 径 0.5		外面：ナデ	密	良	灰褐色	重量 15.0 g
11	5	2区-1	土 馬	残存体長 10.8 残存体高 9.9 脚 長 5.9			外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	橙 色	尾の長さ 6.1 cm 脚部内面に心棒痕あり 上面に黒斑あり



第5図 出土遺物実測図

第5章 総 括

出雲街道は「雲州街道」、「出雲往来」、「出雲往還」、「上方みち」などと呼ばれ、「出雲の殿様の参勤交代道」としての性格も併せ持つ。出雲国、伯耆国、美作国、播磨国の4国をまたがり、松江—安来—米子—溝口—二部—根雨—板井原—新庄—美甘—勝山—久世—坪井—津山—勝間田—土居—作用—三日月—新宮—龍野—姫路の全長53里、中国山地を斜めに横断し、松江から安来を通して伯耆に入り、四十曲峠を越えて美作に至り、津山を通過して姫路で山陽道に結ぶ全長53里（210余キロメートル）の街道をいう。江戸時代には、松江藩をはじめ出雲、美作両国の諸大名が参勤交代に通行したほか、出雲大社への参拝や山陰からの上洛・上阪にも利用された。なお、松江から出雲大社までの松江杵築往還を含めると約250kmとなる。現代の国道9号線、国道181号線、国道179号線とほぼ同じルートである。

特に、古くから出雲街道の通るルートは、野上川の二部谷に入ると、四方に池野峠、金山峠（八子峠）、間地峠、津地峠、久住峠、矢倉峠があり、出雲、備後、備中、美作への重要な交通路であった。

出雲街道は歴史的に考えると「流人の道」「社寺参詣の道」「たたら製鉄の道」「参勤交代の道」など政治的、経済的、社会的、文化的などの多様な性格を帯びていた面がある。

「流人の道」としては、主に中世、都から隠岐国へ向かう流人の道であった。承久の乱（1221年）の後鳥羽上皇、元弘の乱（1332年）の後醍醐天皇などがこの道をたどり隠岐島へ配流となった。また、源平の争乱で以仁王をかばった長谷部信連もこの道をたどり日野郡内に幽閉された。

「たたら製鉄の道」は中世以降盛んになった中国山地でのたたら製鉄の流通を支えた。

「社寺参詣の道」としては、江戸時代を中心に庶民信仰の厚かった「西国三十三番札めぐり」や「四国八十八か所霊場めぐり」などに山陰から向かう道であり、一方、畿内からも出雲大社への参詣や大山まいりのルートであった。

「参勤交代の道」は、この出雲街道が近世における最大の政治的意義をもつものである。松江藩主松平氏（18万6千石）及び広瀬藩主松平氏（3万石）の参勤交代の道であり、松江藩主は往路復路合わせて150回以上、広瀬藩主は往復70回ほどの通行があった。

なお、文久2年（1862年）7月以降に松江藩、広瀬藩の藩主の参勤交代路が変更になり、米子から天万を経て池野から二部宿に至る道替えが行われた。これは、上記の旧来の出雲街道の参勤交代ルートは米子城下から伯耆街道を東進し日野川へ向かい、車尾か八幡で日野川を渡河し、日野川右岸を南下し溝口に至り、再び日野川を渡って二部宿に行くルートであったが、二度の日野川渡河があり増水時期の苦勞があった。そのため、代替ルートとして、米子城下の道笑町から長砂、宗像、日原、茶屋を経て法勝寺川を渡り、天万から池野を通り、今回の調査地の西側でそれまでの出雲街道と合流して二部に向かうルートが利用されるようになった。これは「新出雲街道」とされる。

旧来の出雲街道が溝口の渡して日野川右岸から左岸にわたり、南下し、中祖を通り、野上川を渡り、三部を経て二部宿に向かうルートであった。道替えが行われた結果、池野から来た新出雲街道が旧来の出雲街道と三部の集落の北端で合流し南下し二部宿に向かうこととなった。今回の調査地は新出雲街道と旧来の出雲街道の合流地点から東へ約300mの地点である。

「出雲街道今昔物語」によると、「街道に沿った家々には「道路奉仕」という作業があり、鋤、鉋、

鎌等を持って駆り出された。その作業では、村役人が六尺棒の端を右手に握って道路の中央に立つ。右手を伸ばすと棒の先端が道路の右端に、棒を左手に持ち替えて左手を伸ばせば、棒の先は道路の左端を示して道幅が決まる。森や林の中では上に棒を振ると頭の上の空間が決まる。農民たちは、役人の後ろから棒の動きに合わせて、枝切りや草刈りや土入れや石垣積み等をした。これが農民の道路奉仕だった』との記述がある。

これからすると、出雲街道の道幅は、「六尺+六尺+村役人の腕を広げた長さ」となる。概算で約17尺~18尺となり、5m30cm程度となる。

今回の調査では、出雲街道の一端を垣間見ることができた。丘陵の裾部に土留めのための列石、積み石を施し、地盤をたたくしめて街道としての整備を行ったものである。今回の調査地のルートは、新出雲街道への道替え後も、さらに明治期以降も整備が続けられ、道として長期間にわたり利用されたと考えられる。

道は人が生活していく上では必要不可欠な存在であり、今回のような発掘調査の積み重ねにより、道の実態を明らかにし、人との関わり合いを探究することにより地域の歴史がより明らかになっていくものと考えられる。

参考文献

- ・鳥取県教育委員会文化課
『鳥取県歴史の道調査報告書第6集 出雲街道 法勝寺往来』 1990
- ・野上の郷編集の会 『ふる里 野上の郷』 溝口町二部公民館 1999
- ・南波睦人ほか 『出雲街道今昔物語』 二部地区活性化推進機構 2011
- ・角田寛幸 『伯耆町内遺跡発掘調査報告書』 伯耆町教育委員会 2023

写真図版



1区 表土はぎ



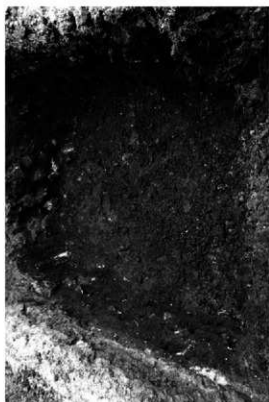
1区 掘下状況



2区 作業



2区 掘下状況 (硬化面)



2区 礫化面



2区 土層断面



2区 礫化面



2区 礫化面



出土遺物 (裏面)



出土遺物 (土甕、裏面)



出土遺物 (表面)



出土遺物 (土甕、表面)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いずもかいどうあと						
書名	出雲街道跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	29						
編著者名	下高瑞哉						
編集機関	一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室						
所在地	〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地 TEL・FAX 0859-26-0455 eメールアドレス yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp						
発行年月日	西暦2025年3月31日 令和7年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村 遺跡番号					
出雲街道跡	鳥取県西伯郡 伯耆町三部	31390	一	35度 19分 08秒	133度 25分 20秒	2024年1月29日 ～ 2024年2月16日	20㎡ 砂防堰堤 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
出雲街道跡	街道跡	近世	道路跡（出雲街道跡）		土師器、須恵器、土製品		
要 約							
・近世の出雲街道跡の発掘調査 ・江戸時代の松江藩の参勤交代にも使用された出雲街道跡と考えられる硬化面を確認した。 ・丘陵裾に遺跡の存在を窺わせる古代の遺物を検出した。							

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書29

鳥取県西伯郡伯耆町

出雲街道跡

2025年（令和7年）3月

編集・発行

一般財団法人 米子市文化財団

〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地

TEL 0859-26-0455

FAX 0859-26-0455

印刷

有限会社 米子プリント社